

図 書 館 報

第117号
 平成16年 7 月13日
 大分工業高等専門学校
 図 書 館
 大分市牧1666番地
 TEL 097(552)6084
 FAX 097(552)6786



南極の昭和基地

〈 も く じ 〉

題 字 「図書館報」	(校 長 沖 憲 典 筆)	1
扉写真 「南極の昭和基地」	(基 礎 専 門 吉澤 宣之)	1
シリーズ・私と読書 「昭和基地での読書について」	基 礎 専 門 吉澤 宣之	2
組写真 「南極の風景」	(基 礎 専 門 吉澤 宣之)	4
図書館運営組織		4
「大分文学散歩(2)」	国 語 科 山田 繁伸	5
私の推薦する図書 「竜馬がゆく」	都市システム工学科 高見 徹	6
私の推薦する図書 「国語入試問題必勝法」	機 械 工 学 科 軽部 周	6
私のすすめたい本 「色彩楽」	制御情報工学科5年 平山 与子	7
平成16年度(前期)学生図書委員名簿		7
「乱読(RAN.doc)～文芸部特製おまけ付き～」	制御情報工学科5年 若林 諒	8
平成16年度 校内読書感想文コンクール		8
編集後記	図 書 館 長 補 佐 大木 正明	8

シリーズ・私と読書(52)

昭和基地での読書について

基礎専門 吉澤 宣之

南極に出発するため必要な私物を準備し、段ボール箱(56cm×39cm×29cm)に梱包したら、スーツケース・自転車・釣竿は別にして15箱になった。そのうち書籍は正味2箱で、1箱30kgは優に越えていたため、運送屋さんや他の隊員に迷惑をかけてしまったようだ。私物は基本的に隊員で荷揚げや荷下ろしをするので、重い荷物はラインを作って流しても辛いのである。自分にとって都合の良いことは人の迷惑であるのはどこの世界でも変わりはない。何事も協力しあわねばならない南極のような場所では改めてそうした気配りが必要だと反省した。帰りは段ボール箱も12箱に減り、書籍も全て分散させた。持って行った2箱分の書籍類のうち、日本や南極での仕事と無関係なものは半分弱くらいだが、これでも一番本を持って行ったのではないかと思う。

何冊か挙げてみると

1. 開高 健全集(新潮社 全22巻)
2. ALL MY TOMORROWS(角川書店 I~IV)
3. ファーブル昆虫記(岩波書店 全10巻)
4. ヘミングウェイ釣り文学全集(朔風社 上下)
5. マクリーンの川(集英社)

といったところで、私の好みがすぐに分かってしまう(あと旧約聖書でも持ってゆけばよかったかな)。実は2は1にも収録されている。これらの本はかなり以前に購入したものの読む暇がなく(言い訳やな~)本棚に眠っていたもので、この機会に「つんどく」を解消してやろうと考えて選んだ。

行ってびっくり、昭和基地では基本的に休日はなく(こういうところは日本でない)、隊長が決める休日日課というものしかない(越冬中は多くて月に4日くらい、夏作業中などは休みなし)。この休日日課に隊員達はDVDやビデオ、散歩、スノーモービル、スキー、昼寝、音楽、漫画などで自由な時間を過ごす、読書をする人はほとんどいない。昭和基地はいろいろな意味で特異な場所であるが、そこで生活する人間はどこにでもいるごく普通の日本人なので昭和基地の文化も基本的には日本と何ら変わりが無い。ちら(ほら)普通でない人もいるが、それ

だって日本の我々の周囲とまったく変わらないわけで、日本の一部を切り取って南極に持って行ったと行って間違いない。読書に関して、もともと読書習慣があるかないかで越冬期間中の読書量は決まってしまうようだ。昭和基地にもかなりの本があるのだが、実際に読まれる本の本数はかなり少ないように思う。余暇に読書するしかなかった(?)昔の越冬とAVやPCなどが使えるようになった現在の越冬との差なのかもしれない。物質的には豊かでも実際、精神面では貧しいのかもしれない、そういう意味でも南極昭和基地文化はまぎれもない現在の日本文化そのものであった。

さて、私の担当の一つである衛星受信業務は気象衛星がのべつデータをダウンロードしてくるため、休日日課でも休めない。さらに「機械もの」は何故か人のいないとき不具合を起こす確率が高いので、なるべく長い間そばで「おもり」をする必要がある。毎日、5時に起きて24時頃に寝るという日本よりも規則正しい生活のおかげで実はオーロラも一番見ていないのである。気象衛星の画像は隊の種々の行動を決定する際の重要な要素であり、気象庁からの隊員もこのデータを参考に予報を出すので、地味ではあるが責任の重い仕事である。目論見通りに休日にゆっくりと読むことはできなかったが、寝る前のほんの1・2時間、好みの本を読むことと愛犬の写真が添付された家からのメールはこのような単調な生活では一番の楽しみであった。

開高健の作品は単行本でほとんど読んではいないのだが、ジャンル毎に一人の作家の作品を続けて読むことは初めての経験であった。彼が小説家として人間として完成してゆく苦悩やそれからの逃避や回帰を作品を通して読み取ることができ、文豪が長靴を履き釣竿を持つ気持ちも歳をとった今、改めて自分の気持ちとダブる。また、ファーブル昆虫記が一般に認識されている昆虫観察記録として以上の内容を持った面白い作品であること、その記者の一人である山田吉彦が作家きだみのるであったことも開高健の文章を通して知った。春にアザラシ、ペンギン、

トウゾクカモメ、雪鳥くらいしか動物を目に出来ない世界で多様な昆虫の世界を満喫でき、持って行って正解であったと思う。

昭和基地では隊員の生活をサポートするため、生活係という仕事を各自が分担する。係の数は結構多く、皆二つないし三つくらいの係を兼務している。私の場合、生活必需品や趣味の木工・金工作業を支援する工房係り、交代で毎朝かかさずローカルホットニュースを発行する新聞係り、そして図書の管理や南極大学と呼ばれる隊員による講義のお世話をする図書・地図・教養係りを担当していた。実際に管理できる図書は南極観測の予算に計上された図書費で購入した公的な本に限られるが、以前に基地に持ち込まれたもの、とくに観測関係の建物に個人的に持ち込まれた本については全く把握できていない。本の大部分は全隊員に共通の生活空間である管理棟や二つある居住棟に分散して置かれている。しかし、最も数が多く充実しているのは実は長年にわたって隊員が持ち込んだ漫画本である。管理棟の洗面所と風呂場の脱衣場には懐かしいものも含めてずらっと漫画が並んでおり、多くの人が夜、歯磨きをしながら、洗濯の待ち時間に漫画を読んでいた。この中で私は唯一、高橋留美子の「めぞん一刻」(全15巻)

を若かりし頃を思い出しながら越冬初期に読んだ。漫画は生活必需品として定着しており、気象庁からの隊員は伝統として越冬前年に発行された1年分の週間漫画雑誌を数種類持ち込んで毎週更新していた。これらの漫画雑誌は気象棟で見ることになっており、そこは観測場所と同時に漫画喫茶でもあって隊員達の憩いの場にもなっていた。これらは1年後には持ち帰り、次隊が翌年分を持ってくるようになっていく。こうした例は珍しく、持ち込まれるほとんどの漫画本は残置される。

毎年南極に運び込まれる荷物の量は増加の一途を辿っており、現在の観測船「しらせ」の能力は限界に達している。後継船の建設も決まっているが、なるべくものを持ち込まず、持ってきたものは持ち帰る努力が一層必要になる。持ち運びの便宜を考えたらCD化するなど、電子書籍が望ましいと思う。しかし、本屋でお目当ての本を探したり、掘り出し物に出会ったり、指をなめながら頁をめくるということも広い意味の読書だと思っている私には、ネット注文や電子書籍は、もう「読書」の楽しみの半分放棄を意味する。4月、「しらせ」から家に届いた荷物をあけ、本を引っ張り出しながらそんなことを思った。



▲昭和基地管理棟本棚

南極の風景



オーロラ▶



◀氷山とペンギン

図書館 運営組織



館長 (石田瑞穂)

— 館長補佐
(大木正明)

— 図書館運営委員会

図書館運営委員会

○石田 瑞穂	朝倉 正治
大木 正明	中野 友裕
工藤 康紀	藪内 富美男
工藤 宗治	道端 康宏
奥山 詳三郎	重光 厚志
佐々木 透	椎原 直子

○印は委員長

おおいた文学散歩(2)

川端康成「波千鳥」を歩く(続)

一般科目(国語) 山田 繁伸

贖罪の旅を続ける主人公大田文子は、飯田高原から九重山を越えて、久住高原へと一人で歩く。そして、伯父の住む竹田へたどり着く。別れてきた恋人三谷菊治へ、旅の宿から手紙を書く。

「大船山の紅葉があまりに美しいので、坊々つるを歩いてみました。三俣山、大船山、平治岳などにかこまれた盆地です。三俣山は昨日と反対側から見るわけです。筑紫山岳会のあせび小屋のあたりまで行きました。あせびの群落のなかに、可愛い万年杉が生えていました。ちょっと杉苔に似て、高さ二三寸です。苔桃や岩鏡も見つかりました。大船山の紅葉のなかの黒いのはみなつつじだそうです。一本の木が六畳敷きくらいに低くひろがっているのもあるそうです」

美しい自然の遠景・近景の描写が、あたかも一緒に歩いているような錯覚を抱かせる。

「宿の近くにもどって、白口岳と立中山のあいだの鉾立峠を佐渡窪におりました。佐渡ヶ島の形をした盆地で、あざみがたくさん立ち枯れていました。佐渡窪から鍋破坂を下って、朽網別に出ると、久住高原の展望がひらけます。鍋破坂は雑木のなかをくぐって石みちをおりてゆきます。自分の踏む落葉の音を聞けばかりでした」

文子は、坊々つる盆地の一角にある法華院温泉に宿をとった。法華院の名は、この地に中世山岳宗教の霊場として栄えた九重山法華院白水寺があったことによる。「久住の南登山口に、猪鹿狼寺という珍しい名の寺のあとがあります。猪鹿狼寺といい、法華院といい、幾百年の歴史をもつ霊場です。九重の山々が霊場であったのです。私も霊場を通過して来たような気がします。ほんとうによかったと思います」

文子の苦悩は、九重の山々によって癒される。文子の心は、より明るく、より純粹になっていく。

猪鹿狼寺は、もとは大和山慈尊院と号し、この地は殺生禁断の霊場であった。ところが、鎌倉時代、源頼朝が富士山麓で巻き狩りをするため、その手法を阿蘇大宮司に家臣を遣わして学ばせた。大規模な狩猟の予行演習をこの久住高原で行い、多くの畜生が殺された。悔いた頼朝は、畜生の供養を願い、寺の名を久住山猪鹿狼寺と改称させたとの言い伝えである。

「寺のあと」と出てきた猪鹿狼寺は、実は現存している。役場などのある久住町の中心部から、赤川方面へ1キロほど上ると、国道の右手に小さな寺が見える。

深田久弥の『日本百名山』によると、白水寺と猪鹿狼寺の二寺は相対立して、それらの寺の山号が山の名と化したそうだ。山群の総称を九重山、そして、その主峰を久住山と呼ぶようになるまでには、長いこと時間がかかったらしい。

主人公文子は、竹田の街を歩く。

「田能村竹田の旧居、田伏屋敷跡のキリシタンの隠れ礼拝堂、中川神社のサンチャゴの鐘、広瀬神社、岡城址、魚住の滝、碧雲寺などの名所も、半日足らずで歩きました」

文子の手紙の最後の方は、次のようになっている。

「岡城址には、石崖のほか、なにも残っておりません。でも、要害の高地は見晴らしがよくて、秋晴れに山が望めました。祖母、傾の山々、それから反対の方に九重、その大船のいただきに薄い白雲がかかっているだけでした。歩いて来た高原や峠がその方にあります。高原の松かげやすすきの穂波のなかで、私があなたを思いつづけた時、あなたにお別れ出来たのだと思います」

文子は、菊治への気持ちの整理をこの美しい九重の山々のなかで果たした。振り返る九重の山々は、菊治との今までの人生を象徴するかのようにも読み取れる。そして、手紙の最後は「父の町から新しい出発をいたします。さようなら」と結ばれている。

「波千鳥」は、新潮文庫版『千羽鶴』から引用し、深田久弥の『日本百名山』は、新潮文庫と朝日文庫を参照した。



いからじ
▲久住山猪鹿狼寺

私の推薦する図書

竜馬がゆく(全八巻)

司馬 遼太郎

都市システム工学科 高見 徹

本書は、日本人ならば誰もが知っている幕末のヒーロー坂本竜馬についての物語である。現在の坂本竜馬像を決定付けたあまりにも有名なこの著書を既に読破した学生も多いと思う。本書で描かれる坂本竜馬の魅力は、身分の低い下級武士の出であり、幼い頃は無能の烙印を押されながらも、成長とともに能力を開花させ、自由奔放な態度と発想を失うことなく、驚異の行動力で維新回天の業を成し遂げたことにあるだろう。本書ではその行動力と颯爽と時代を駆け抜けた姿を「竜馬がゆく」というタイトルに表している。実際に作中でも竜馬が薩長同盟や大政奉還を画策するために、江戸から京都、あるいは長州へと幾度となく街道を徒歩で(!)往来する様が描かれている。これだけでも交通手段の発達した現在では考えられないことだが、私が注目するのはそのスピードである。まるで「飛脚のよう」と表現されているように実際に相当なスピードであったらしい。

私が大学4年生の頃、配属先の研究室に韓国からの留学生がいた。彼女はいつも屋外の実験施設(1階)と屋内の分析室(6階)の間をエレベータも使わずに小走りで行き来していた。私は当初、なぜいつも走っているのか理解できず、「おかしな人だな」くらいに思っていた。しかし、その後私が大学院へ進学し、研究に熱中し始めた頃、いつしか自分自身が実験室間を走っていることに気が付いた。私は意識して急いでいたのではなく、無意識に走っていたのである! その時、当初奇妙に思えた留学生の走るといふ行動の意味を理解した。その留学生も私も学位取得という目標を達成するために夢中で突き進んでいたのである。人は明確な目標を持ち、それを成し遂げようとする、自然にその行動するスピードが速くなるのだ!

「世に生を得るは事を成すにあり」。今はちんたら歩いている学生諸君がいつの日か自分の目標を見つけ、私を追い越して歩き進んでくれることを願っている。

国語入試問題必勝法

清水 義範

機械工学科 軽部 周

「国語入試問題必勝法」。このタイトルを見た人は、その殆どが「学習参考書」だと思うことでしょう。就職面接などで「最近読んだ本は?」と聞かれたときに言うと、「こいつはマニュアル本しか読まないヤツだな」などと勘違いされるかもしれません。いきなり話がそれますが、私は大学入試の面接でクロニン著「青春の生き方」(医学生の青春を描いた古典的名作。おすすめ!)が好きだと答えたところ、試験官に見事に勘違いされ、「もっと文学的な本を読みなさい」と言われました。このタイトルもマニュアル本つまいですね。

さて問題の「国語入試問題必勝法」ですが、実は小説です。登場人物は二人だけ。国語が苦手な受験生と、敏腕の家庭教師の掛け合いで話が進みます。家庭教師の先生が伝授する技が面白く、ぐいぐいと引き込まれていきます。最後もオチが決まっています。爆笑もの。まるで落語のようです。ユーモア小説なので実際の国語の試験にどれだけ有効かわかりませんが(かえって成績が落ちるかもしれません!)、読んだ後、国語のテストを受けてみたい気にさせられることは保証できます。また、本書を読むことで、現在の国語教育の問題点も見えるのではないかと思います。

この本には、表題作の他に6編のショートストーリーが入っています。どれも面白いのですが、私が一番好きなのは「霧(もや)の中の終章」という短編です。おじいさんがボケていく過程が、おじいさんの目線で書いてあります。昔の志村けんのギャグを彷彿とさせるような面白さ。読んでいるときは笑えるのですが、読み終わったあと、少し怖くなります。「ボケる」ということはこういうことなのかな、と思わせるようなリアリティーたっぷりの名作です。

作者の清水義範は、「国語入試問題必勝法」で吉川英治文学新人賞を受賞しています。最近では、国語の教科書そのものをパロディ化した作品を含む「日本語の乱れ」(集英社文庫)という本を出版しており、こちらもお勧めです。これを読むと、作者がいかに国語教育というものに関心を持ち、危ぶんでいるかが更に深くわかると思います。高専の皆さんの中には、「国語」「読書」があまり好きではない、という人も居るでしょうが、清水義範の本を読むと、国語という教科が少し身近に感じられるようになるのではないかと思います。

私のすすめたい本 「色彩楽」

色彩を楽しみましょう！

制御情報工学科 5年 平山 与子

今の気分を色に例えるならば、みなさんは何色を思い浮かべますか？ちょっと隣の人と話し合ってみて下さい。私は今ピクニックに行きたい気分なので草原の鮮やかな緑を思い浮かべましたが、今日はデートの日で嬉しいからピンクだとか、何だか憂鬱で雨空のようにダークな青だとか、思い浮かべる色は人によって様々だと思います。このように私たちの毎日の心と色とは深い関係にあるのです。

私が今回紹介したい本は、そのような色彩と心に関するものです。本のタイトルは「色彩楽」。色を“学ぶ”のではなく“楽しむ”ことで、心や暮らしをより充実させよう！というテーマです。そのテーマに沿って、色の基本知識、それぞれの色が持つ意味と人に及ぼす影響、状況に合った配色方法などを分かりやすく説明しています。

また、この本にはぬり絵が付いていることも特徴的です。様々な場面を想定した心理テスト的なぬり絵があり、使った色から自分が気づかなかった感情や能力を発見できます。そして気持ちを落ち着かせたい時に無心に塗れば、自分のマイナスの感情を分散し、ポジティブカラーを吸収することができるそ

うです。私は久しぶりにぬり絵をしたのですが、確かに気分がスッキリし、使った色で自分の心を客観的に見ることができたと思います。

色が私たちの心と深く結びついていることは誰もが経験的に実感しているはずですが、ですからその感覚と共にこの本を読むと、きっと自分の周りの人や物が持つ色に興味を沸き、その色の意味しているものが分かってくるようになると思います。私がこの本を読んでから気づいたこと。例えば、ゴレンジャーなどの戦隊ものでリーダー的存在なのは、たいてい赤レンジャーだと思いませんか？それはきっと赤が他の色よりも強いパワーを持ち、見る人に最も印象を与える色だからでしょう。また、先ほど私が今の気分を緑に例えたのはピクニックに行きたいからでしたが、実は緑の持つ安らぎを求めていたのかもしれない。

こんな風に考えると、色と心を知るのはとても面白いことだと感じませんか？色についての知識が増えれば、毎日の生活がもっとワクワクして楽しいものになるのではないのでしょうか。また、将来ものづくりに携わるみなさんにとって色と心を知ること、専門分野の内容に加えて重要な要素になると私は思います。色から人の心を汲み取れる感性を身につけ、使う人に喜ばれるものを作る技術者になってもらいたいです。

平成16年度(前期)学生図書委員会名簿

学 年 学 科	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年
機 械 工 学 科	林 克洋	荻本 亜哉	村田 政幸	二宮 祐介	山神 悠太
	松本 知晃	本田 優希	吉廣 俊志	阿南 雅裕	八坂昭太郎
電 気 電 子 工 学 科	戸次 幸徳	梅原 優志	◎松下 容子	小手川裕輝	深田 斉仙
	工藤 宏幸	有森 慎一	足立 智則	大島 洋明	富永 翔太
制 御 情 報 工 学 科	松浪 拓海	西田 隆	宮崎 晋伍	◎井澤 良公	★若林 諒
	田中 雄大	渡辺 成浩	重光 葵	横田 有哉	後藤 孝志
土 木 工 学 科 (都市システム工学科)	浦竹美優紀	久光 沙知	安部 恭平	大鶴 政輝	神崎 美光
	紀 めぐみ	高野 健人	入江 貴士	三浦 紘司	藤本 翔

★委員長 ◎副委員長

「乱 読 (RAN.doc)」 ～文芸部特製おまけ付き～

制御情報工学科 5年 若林 諒

どうも、御初に御目に掛かります。私、大分高専文芸部黒幕及び図書委員長を勤めさせて頂いております小物に御座います。当方、何の因果か成り行き上、図書館報に「今後の展望」という題で原稿を頼まれました故、御目汚しの文章なれど、暫し御付き合ひ願います。

しかし、振り返ってみれば、私が図書館で本を借りるようになったのは二年程前からではなかったでしょうか。そもそも、本というものを読み始めたのが中坊の終わり頃に御座います。あつという間に嵌りまして、転げるように文芸部に入ったので御座います。

暫くは先輩方の本を借りて読んでおりました。また、自分でも気に入ったシリーズを買い漁ったもので御座います。まあ、当然では御座いますが、私のような貧乏学生、それでは直ぐに無一文に成ってしまいます。

そこで、幸か不幸か、私の目に留まったのが、図書館だったので御座います――。

それからというもの、自縛霊のように憑いて、読みたい

本を片っ端から注文している次第で御座います。カウンターで簡単に何冊も頼めてしまうので、つつい多く…。もし全て自分で買っていたならば…そんなことは想像も出来ません。

現在、図書館には私の趣味のもの（ミステリ）が多数配架されております。他にも兎に角大量の本が存在しているのでありまして、小説だけでも全てを読むのは気の遠くなるような話で御座います。しかし、私は是非、皆様に先ず乱読して頂きたく思います。本との（ホントの）出逢いは突然。好きな本が必ず見付かる筈で御座います。

そして、年に一度の読書会にて、美味しいケーキを頬張りながら、好きな本について喋ったり、読書感想文を書いて豪華賞品を貰ったりして、幸せに成って頂ければこちらとしても幸いで御座います。他にも、年間多読者BEST10にも豪華賞品が贈られます故、遠慮無く注文しまくって、借りまくって、読みまくって下さい。

それでは、悪文失礼致しました。

（以下おまけCM）尚、文芸部誌『神鬼一転』は図書館のカウンター正面にて常時展示致しております。御自由に手に取って御読み下さい。

平成16年度 校内読書感想文コンクール

募 集 要 項

主 催／教官図書委員会・学生図書委員会

応募作品／自由

原稿の長さ／2,000字

締 切 日／9月1日(水)

提 出 先／クラスの図書委員又は図書係まで。

賞 品／入選者には賞状と賞品を贈ります。

夏 休 みの 貸 出 し

貸 出 日／7月13日(火)から

返 却 日／9月1日(水)

貸出し冊数／1人5冊以内

◆長い夏休みは読書に絶好の機会です。

この機会に図書館の本を借りて読みましょう。

◆図書館は夏休みも開館しています。

（開館時間：平日 午前9時～午後5時）

◆冷房の効いた閲覧室をあなたの学習室や書斎として利用して下さい。

◆良書はこの世の宝の一つ。

青春期における一冊の本との出会いが、あなたの人生を変えることも……



編 集 後 記

今年は例年になく早目に暑い夏がやって来ました。同時に、図書館報も「熱い」内容となって無事皆さんの手元に届くこととなりました。

巻頭には吉澤先生から鮮やかな写真つきの御寄稿をいただき、さらに4頁目からは、山田先生、高見先生、そして軽部先生に執筆を御願ひし個性豊かな各先生方の文学的側面を見せていただきました。また、学生諸君にも協力を願ひ、館報自体が大いに充実しました。

本は著者の人生観を見事に映し出し、読み手の人間性を確実に豊かにしてくれます。その思いが少しでも皆さんに伝われば、と心から願うばかりです。
(図書館長補佐 大木 正明)